

外国語学部教員が順天高校「Global Week」で模擬講義を実施

高大連携校の一つである順天高等学校では、毎年11月にGlobal Weekと称した「立場を超えて共に学ぶ」ための学校行事を行っており、大学教員をはじめ、小中高の教員、企業・団体職員らを招いて講座を開講し、生徒たちは講師と対話しながら課題研究に取り組んでいます。

2021年11月15日(月)～19日(金)にかけて、延べ約60近くの講座を開講しており、そのうち外国語学部からは3名の教員が参加をし、高校生に対して講義を行いました。

まず、11月16日(火)に、坂本ロビン先生からテーマ「Can Japan reach the 2030 goal of having 30% of women in a management role?」(Zoom形式・5名参加)について講座を行いました。日本政府は、指導的地位に占める女性の割合を30%にするという目標「2030(にいまるさんまる)」を掲げているが遅々として進まず、現状抱える問題、そして達成を困難としている要因は何かなど、データを元に説明しました。

高校生の意見の中には、「家事の負担が女性に偏りがち」「キャリアと家庭の両立がなかなか難しい」等の課題を認識するとともに、ジェンダー平等な社会を目指すには、制度設計、意思決定には、女性の参画の機会を増やすとともに、男女問わず意識改革が大切であることを述べました。

そして、同日16日(火)に行った田中洋先生のテーマ「ドイツとサステナビリティライフスタイル・文化・ことば」(対面形式・15名参加)は、ドイツは環境先進国として世界をリードしてきたことを説明し、その環境への取り組みや意識の根底にあるドイツ的な考え方(≡ライフスタイル)、文化、ことばについて説明をしました。

グループワークでは、生徒たちからドイツの特徴的なところとして、「自然が豊か」「ビールが有名」「犬の税金がある」など挙げられましたが、田中先生からは、実はドイツには「駅の改札がない」、「トイレは有料」であり、ドイツの人は「納得がいくまでとことん議論する」人が多く、日本とは違った考え方による社会があると説明し、みなさんがドイツから学べること、逆に手本として誇れることはどのようなことがあるかについて考えてみようとして述べました。各グループでは、思い思いに活発な議論が交わされていました。

最後に11月19日(金)には、森和先生のテーマ「今日はどんな日?～占いから覗き見る中国古代の社会～」(対面形式・17名)は、2000年以上前の中国の古いお墓から“占い”の本が見つかり、当時の人々の日常生活や関心ごと垣間見ることができます。

占書の一つである「日書」を元に、今日はどのような日であるか、日書には占辞(特定の1日における吉凶禍福を占うもの、特定の行為に対する吉日良日を列挙したもの等)があることを説明しました。

昔の人々は、災いを避けるためにおまじないや、大安吉日を選んでの重大事(結婚など)

を行ってきたが、今でこそ迷信や非科学的とか思われる部分もあるが、未知の事象に対する不安や畏れに対しては、何か拠り所を求めようと行動することは、今も昔も変わらないと述べました。

講義終了後も、個別に質問する生徒たちの姿もあり、関心の高さを伺えました。

順天高校の教員からは、様々な分野の先生から講義を聞けることは、生徒たちにとってとても有意義であり、知見を高められることができる。

講座提供として、参加された本学の教員に対して御礼を述べられました。



11月24日
〈高大接続推進室〉